

明星院

福江島・福江の郊外にある明星院は 8 世紀から 9 世紀にかけて、五島を経由して唐に渡った遣唐使の迎賓館だったという言い伝えが残っている。この寺にある銅製の薬師如来像は、使節の一人が海を渡る危険な旅を守るオマモリとして島に持ち込んだと考えられ、この時代のものであると思われる。遣唐使で最も有名な一人、仏教の僧・空海（774-835）が 806 年に中国から帰国した際、この寺に名前をつけたとされている。伝説では、空海は自分が得た知識が日本とその人々のためになるようにと祈ったという。翌朝、その願いが叶った証として明るい星が空に現れ、空海は祈りの場を「明星庵」と名付け、これが後の明星院となった。

島を治めていた五島家は 14 世紀以降、この明星院で祈願を行い、寄付を行った。17 世紀には五島家の資金で本堂の内装が塗り替えられ、狩野派の絵師に依頼された天井画は、121 枚の草花と鳥の絵で飾られている。天井の四隅には、死者を極楽浄土に導く天使のような存在である天女が描かれている。また、部屋の外陣の中央付近、大名が座って祈る場所の真上には、東アジアの神話で王の誕生を知らせ、権力の象徴とされる鳥「鳳凰」が描かれている。